

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：14503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653181

研究課題名(和文)メタ認知的知識の構造変容を測度にした読解指導プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of an instruction program of reading comprehension on the basis of structural change of the meta-cognitive knowledge

研究代表者

黒岩 督 (KUROIWA, MASARU)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：80153394

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、(1)文章読解についての児童の読解方略を調べること、(2)教師の読解指導についての信念を調べ、読解に関するメタ認知的知識との対応関係を検討すること、(3)これらをもとに、読解にかかわるメタ認知的知識の構造変容を測度とした指導プログラムを開発することを目的とした。読解方略質問紙を作成し、小学校4,5,6年生を対象に方略使用と方略の重要性認知についての調査を実施した。経験年数の異なる教師を対象に、教室での方略指導やそこでの自身の思考、判断等についてインタビューを実施した。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study were to investigate the children's reading comprehension strategies for the text reading, and to examine the beliefs about reading instructions of teachers, to consider the correspondence between the meta-cognitive knowledge about reading instructions. Based on these, it was also an aim to develop an instruction program on the basis of structural change of the meta-cognitive knowledge of reading comprehension. In order to investigate the cognition of the use and importance of the strategies, elementary school 4, 5, 6 grade was performed reading strategies questionnaire. To the teachers with different teaching experience, interviews about reading strategy instructions performed by them and their own thoughts and judgments, such as they are doing in the classroom has been carried out.

研究分野：社会科学

キーワード：教育系心理学 メタ認知的知識 文章理解 読解方略 指導プログラム

1. 研究開始当初の背景

(1) PISA 調査や全国学力テストの結果から、児童の読解力に課題があることが指摘されている。教育現場での「言語力」の重視に代表されるように、文章の読解は様々な教科・領域学習のための学力の基底に位置づけられると同時に、読解力を向上させる指導法の開発が求められている。また、現行の学習指導要領においては、各教科を通して確かな学力(自ら課題を見つけ・学び・考え、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する能力)の形成が求められている。こうした学力観と PISA 調査の読解力の観点には共通するものがある。

(2) 文章の読解においては、その過程をモニターしながらコントロールしていくためのメタ認知的知識が機能していると考えられる。しかし、これまでのところ、それらは学習者や教師から収集された具体的な資料に基づいて把握されてはいない。読解力の育成に関して、心理学領域では、学習行動をモニターしコントロールするメタ認知的活動の訓練とこれを支えているメタ認知的知識の形成が必要であるとされ、読解方略の訓練やメタ認知的活動自体を訓練する学習方法などの実践研究が行われている。しかし、これらの研究ではメタ認知的知識それ自体が明確にとらえられておらず、したがってそれがどのように変容するのかを具体的に測定する手段も準備されておらず、訓練の効果を課題の達成度などの量的変化で検証するにとどまっている。

(3) 本研究では、読解に関する児童生徒のメタ認知的知識の構造変容に着目し、これを効果測定の尺度にして指導プログラムの開発を行い、実践場面での有効性を検討する。有効性が確認されれば、文章読解についてのメタ認知的知識を構造的に把握し、その変容を定量的に測定することによって、これまで教師の「力量」や「センス」に頼りがちであった読解指導を、メタ認知的知識の構造変容の視点から構成していくことが可能になり、これらの知見は指導方法の開発や教員養成カリキュラムの改善といった形で教育実践や教員養成の場に還元することができる。そこで本研究では、児童生徒の文章読解についてのメタ認知的知識の構造変容を把握するための測度を構成するとともに、指導履歴の異なる教師間の読解指導についての信念を調べ、両者をつき合わせることでメタ認知的知識の構造変容を測度にした読解指導プログラムの開発を行い、その有効性を検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は次のとおりである。

(1) 文章読解についての児童生徒の読解方略を調べ、方略使用の観点から読解にかかわ

るメタ認知的知識の構造変容を把握するための測定法・分析法を開発する。

(2) 指導履歴の異なる教師間の読解指導についての信念を調べ、読解についてのメタ認知的知識との対応関係を検討する。

(3) 目的(1)及び(2)の遂行により得られた成果にもとづいて、メタ認知的知識の構造変容を測度にした読解指導プログラムの開発を行う。

3. 研究の方法

本研究では、以下の方法を用いた。

(1) 児童の読解方略を調べるための評定項目を作成するため、面談及び授業観察により小学校教師が読解指導で留意している事項を収集するとともに、犬塚(2002)及び久野(2007)の方略リストも参考に、28項目からなる質問紙を作成した。小学4~6年生を対象に、各項目について読解時の使用程度を5段階で評定させた後、重要度の高い項目と低い項目を選択させた。得られたデータをもとに、読解にかかわるメタ認知的知識の構造変容を把握するための測定法・分析法を検討した。

(2) 上記調査の対象児童について、その読解力の水準を反映する資料として、担任教師の3段階評価、市販テスト(「業者テスト」)の成績を収集するとともに、久野(2007)の読解テストを実施した。

(3) 読解についての児童のメタ認知的知識を検討する際の対照条件とするため、メタ認知水準が高い大学生を対象に、読解時の方略使用と読み手の特性との関係を調べた。

(4) 教師の読解指導についての信念を調べ、読解についてのメタ認知的知識との対応関係を検討するため、指導履歴の異なる教師を対象に、読書指導や読解指導に関する場面での指導の実際について面談による聞き取り調査を行った。

(5) 読解指導場面における教師の処遇の実際及び児童の活動を調べるため、小学4~6年の学級において授業観察を行った。

4. 研究成果

(1) 児童の読解方略と読解力の関係について

教師への聞き取り、授業観察及び先行研究をもとに作成した質問紙を、公立小学校の4~6年生を対象に実施した(2校17学級526名)。方略使用の背後にあると仮定されるメタ認知的知識を推定するため、調査で得られた5段階評定値に因子分析を適用し、その次元性を検討した。犬塚(2002)及び久野(2007)との共通性は低く、クリアカットではないも

の5因子を同定し、因子得点を用いて学年間比較を行った。その結果、有意差は見られず、学年進行にともなう変容は明らかにできなかった。また、重要度の高い項目と低い項目の選択頻度の分布についても、学年差は認められなかった。方略使用と重要度についての項目選択にも一定の関係は見られず、方略使用の程度と方略の重要性の認知は必ずしも一致しないことが示された。

読解方略の使用や重要性の認知に対応させる読解力の指標を得るため、対象児童の読解力の水準を反映する資料として、担任教師の3段階評価(「平均以上」「平均的」「平均未満」)、市販テスト(対象児童に対して前年度末に実施した当該学年の学習内容についての総括テスト)の成績を収集するとともに、久野(2007)の読解テスト(説明文を読ませ、その「読み取り」についての正誤とその理由を記述)を実施した。これら3つの指標間の相関を分析したところ、無相関または弱い相関であった。また、市販テストの得点分布には「天井効果」が認められ、読解力の指標としては妥当性に欠けることが明らかになった。これらの成果については、発表準備中である。

(2) 読解にかかわるメタ認知的知識の構造変容について

各児童の方略使用、重要性の認知、読解テスト(久野, 200)の成績、読解レベルについての担任教師評定の関連を検討したが、有意な相関関係は認められず、メタ認知的知識の構造変容を効果測定の指標として組み込むことの再考を促す結果となった。因子得点が学年進行とともに増加しない結果と合わせて、メタ認知的知識の構造変容を測度として用いることの限界が示された。改めて別の観点から着想を再吟味する必要がある。

(3) 大学生における読解時の方略使用と読み手の特性との関係について

大学生280名を対象に、図表をともなう説明文についての読解方略を収集し、その構造を明らかにするとともに、作成した読解方略リストの妥当性の検証のため、読解効力感尺度との関連について検討した。従来の方略に加えて、イメージ化したり図表の視覚的情報を参照する方略や、図表と文を統合理解する方略が見出された。また、本リストにより読解効力感の個人差による読み方の違いも測定できることが示された。この成果については学会発表を行った。

上記の読解方略リストを使用して、理科教員志望群(180名)とその他教員志望群(96名)で方略使用の違いを検討した。前者では内容を図式化・イメージ化する読み方が強かったが、一方で指導における重要度評定では両者に差はなく、自身の読み方との乖離が見られた。メタ認知的知識と読み方のコントロールは対応しておらず、こうした非対応を規

定する要因を明らかにするとともに、効果測定に組み込む指標の再考が要請される結果となった。この成果については学会発表を行った。

(4) 教師の読解指導についての信念と読解についてのメタ認知的知識の関係について

教職経験5~20年の教師8名を対象に、教室での読書指導や読解指導に関する場面で行ってきた教授学習指導過程の実際と留意している点、それが児童に及ぼす影響、そこでの教師自身の思考や判断、気づきなどについてインタビューを実施した。さらに、教室場面での児童の活動及び教師の処遇の実際を調べるため、小学4~6年各1学級において授業観察を行った。

得られた定性的データは個人差が大きく、教師の経験年数あるいは指導履歴の違いに対応するような明確な特徴、類型化できるような一貫した傾向は見出されなかった。全般的には、読解にかかわる教師の諸介入が導く児童の思考活動や情報処理過程についての関心が限定的で、その帰結として方略の指導やその評価も十分でない可能性が示唆された。この成果については、学会発表準備中である。

(5) 今後の課題について

本研究によって明らかになった今後の課題を以下にあげる。

読解指導プログラムの開発について

児童の読解方略と読解力の関係、教師の読解指導についての信念と読解についてのメタ認知的知識の関係に関して、現在のところ一義的な結果が見出されず、メタ認知的知識の構造変容を測度とする読解指導プログラムの開発には至らなかった。しかしながら、教員養成あるいは教師の資質向上の現状や今後の在り方を念頭に置けば、個人の「力量」や「センス」に帰しがちであった読解指導の改善に向けて改めて着想を吟味しながら、メタ認知的知識に着目した指導過程を開発することは意義があると考えられる。

教師の読解指導に関する信念について

本研究では、教師の指導履歴の違いに対応した読解指導についての信念やメタ認知的知識に顕著な特徴や傾向を明らかにすることができなかった。対象者数を増やすとともに、インタビュー項目の精選と構造化が必要である。教室場面での授業観察についても同様である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計3件)

1. 中條和光・山根嵩史・福屋いずみ・田中光・有馬比呂志, 理科教員志望学生における説明文読解方略の使用, 日本教育心理学会第

56 回総会，2014 年 11 月 7・8・9 日，神戸国際会議場（神戸市）

2．山根嵩史・福屋いずみ・田中光・徳岡大・徐芳・有馬比呂志・中條和光，図表を伴う説明文読解時の方略の構造，日本心理学会第 78 回大会，2014 年 9 月 10・11・12 日，同志社大学今出川キャンパス（京都市）

3．山根嵩史・中條和光，図表を伴う説明文読解時の読解方略の構造，日本教育工学会第 28 回全国大会，2012 年 9 月 17 日，長崎大学文教キャンパス（長崎市）

6．研究組織

(1)研究代表者

黒岩 督（KUROIWA MASARU）

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：80153394

(2)研究分担者

中條 和光（CHUJO KAZUMITSU）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90197632